



平成 21 年10月5日

『吉田総理とG20サミット』

上野製薬株式会社 監査役  
元駐オーストラリア大使  
東京六本木ロータリークラブ会員

深田 宏 様

大磯の旧吉田邸が全焼したという報道に接して、一つの時代が終わったと感じた人は少なくなかったであろう。私達昭和25年度のクラスの者は、白金にあった大臣公邸の使用人のための長屋に、大きな犬と共に合宿することになった。公邸の主は、吉田茂総理兼外務大臣で、折にふれて正式の昼食会を開いて下さったり、都内某所に連れて行って下さったりした。大柄ではないが、いつも堂々として名物の葉巻をたしなんだりしておられた。後日、私が英国での研修中に、吉田さんがロンドンに来られることになった。応援に狩り出された私は、車のドアを開けたり、ヘンリープールでの仮縫いのお伴をしたりした。帰朝後間もなく、その時の慰労ということで、渋谷の麻生太賀吉邸に招かれ、ディナーの席でかしこまっていたところ、たまたまその日に吉田内閣が倒れるという事態が発生し、我々は全く忘れ去られてしまった。

私が手伝っている団体の一つで、荒船亘子さんと一緒に仕事をするようになった。荒船夫人は麻生太郎現首相の妹さんで、いつもお兄さんにそっくりと言われる由だが、吉田総理と共通しているのは、いつでも堂々としておられることだ。頼もしく、愉快的

ことである。

一つの時代が終る時には、必ず新しいことが始まる。世界的金融危機に対応するために発足したG20サミットがその一つである。1975年のランブイエ会議から主要国首脳会議にかかわった者の一人として、まことに感慨深い。世界のGDPの95パーセントと人口の三分の二を代表するこの会議が、数多くの障害を克服して具体的成果を生み出すよう心から期待する。

新しい時代には、新しい外交スタンスが求められる。わが国が、一方において米国とのしっかりした関係を維持しながら、他方において東アジアでの政治的経済的協力のための広域的な基盤を形成してしることが、正に焦眉の急になって来ていると考える。



※本文は、平成21年4月、雑誌「霞関会」に寄稿されたものを転載しました。